大淫婦バビロン
の倒壊
I
The fall of Babylon
the great
正道
SEIDOU

目次

はじめに・・・

はじめに

まず、本書の特殊性について、お話しておかなければならない。

私は、一つの書籍を上梓するまでに、基本、創作者としての自分に、次の五つの工程を課している。すなわち、

① アイディア・スケッチ
② 草稿
③ 初稿
④ 改訂稿
⑤ 最終稿

の五つである。とくに最終稿は、さらに幾度かの推敲を経ることになるだろう。

度を越しているように思えるかもしれないが、私はもともと文章力があるほうではない。そのため、どうしてもこのような手間をかける必要性が出てくるのだ。

となれば、現行九冊から成っている福音書シリーズの各書もまた、やはり右のような工程を経て、電子書籍として公開されていることになる（ただし初版は④で出した）。

しかしながらである。本書『大淫婦バビロン』に限っては、この原則を破っての公開に踏み切った。すなわち今回ばかりは、③の初稿状態での公開に踏み切ったのである。

その理由を一言で言えば、結局のところ、私には、時間をかけて、この作品を熟成させる余裕がなかったからである。というのも、たぶんこの『大淫婦バビロン』は、今このときに公開しなければならなかったからだ。

つまり本書は、時間的な制約がついている文書なのである。そして、その制約を与えたのは、もちろん天意であり、またヘイマルメネー（運命）に他ならない。

いずれにせよ、この『大淫婦バビロン』は、初稿レベルのクオリティしか持っていないことになる。よって、読者の皆さんにとっては、本書は、読みづらいところや、食い足りないところが満載の作品となるだろう。

いちおう最低限の意思表明は出来ている文章になっているとは思うが、読者にあっては、どうか幾重にも寛容なる心持ちをもって、この作品に接していただきたい。

なお、本書に盛り込まれた内容は、神の総体的な肢体を表現するにあたって、非常に重要なパーツとなることが予想される。つまり本書は、いつか新たなる聖書の一端を担うことになるだろう、ということだ。

したがって、この小さき書が、いつしか何番目かの「福音書」となるまで成熟していく可能性は、かな

り高いものと思われる。

全体の目次

はじめに

第一部

第1章　現職を否定する啓示
第2章　アレゴリー（寓話）
第3章　現象世界における不都合
第4章　この世界は誰のためのものか
第5章　命の価値の差異

第二部

第6章　現象としてのタナトス
第7章　霊的観点から見たタナトス
第8章　タナトスを正当化するもの

第三部

第9章　宗教としてのマルクス主義
第10章　マルクス教とタナトスの相克
第11章　純粋なファンダメンタリスト

第四部

第12章　大淫婦バビロンについての記述
第13章　大淫婦バビロンの眷属
第14章　大淫婦バビロンの倒壊

第五部

第15章　定年制度廃止の提言
第16章　死の受容
第17章　タナトスの社会的受容
第18章　安楽死についての考察
第19章　安楽死の事前申請
第20章　愛の一元論

第六部

第21章　残酷性の自覚
第22章　ボトムアップの宗教
第23章　円柱と半円柱
第24章　贈る言葉

第一部

第1章　現職を否定する啓示

二〇二三年六月

すでに福音書シリーズでも言及していることだが、私は介護老人施設で、介護士として働いている。介護士として働いてきた期間は十五年ほどになり、今いる施設で働いている期間も、そろそろ十二年目になろうとしている。その十二年間は、私が介護福祉士（国家資格）として奉職した期間でもあった。

私はこのまま介護士を続けながら、同時に「キリスト」としての活動も続けるのかと思っていた。だが、どうやらそうではないらしい。

というのも、二〇二三年六月に行われた、施設の全体会議を中心に、その前後、連続して「大淫婦バビロン」についての啓示が、天から降ってきたからである。

といっても、それはゼロから始まった啓示ではない。そうではなく、それまで漠然と断片的に考えていた幾つかのイデー（理念）が、包括的なインスピレーションによって、唐突に一つの形状にまとまった、という感じなのだ。

介護業界を裁く立場

それによって私は、

「自分がどうして介護業界で仕事をしなければならなかったか」

「そこで何を見なければならなかったか」

について、明確に知ることになった。また自分がなぜか「ケアマネージャーの資格を取ってはならない」という気持ちを抱き続けていた、その真の理由についても、明確に知ることになったのである。

啓示が教えてくれたその理由とは、端的に言って私が、

「介護業界を否定する立場に就かなければならなかったから」

だった。私は老人介護の世界を「大バビロン」「大淫婦バビロン」と呼んで裁かなければならなかったのだ。もちろん再臨のキリストとして。

この「大バビロン」「大淫婦バビロン」というのは『ヨハネの黙示録』の第十七、十八章に出てくる言葉である。またしても『黙示録』である。そうであるため、

「ああ、本当に私は『黙示録』に描かれた情景を、現実の世界のなかで具象化させるために生まれてきた人間なのだな」

と、そのように思わずにはいられなかった。かつて『黙示録』の第十二章に出てくる「太陽を着た女」についての一連の象徴を、この身をもって具象化させたように（＝第四、五福音書）。

そうして私は、次に、

「老人介護の主要な存在意義は、天意（＝黙示録）によって否定されなければならない。このことを知った上で、これからの私が、さらに介護業界で仕事を続ける意味とは何なのだろう」と考え始めた。

辞職勧告

するとどうだろう。今度は私のもとに、

「いや、もっと単純に考えればよい。老人介護は、お前にとり、意義も意味もないものとなったのだ。だから今こそ、その仕事を辞めよ」

と命じているような出来事が連続して起こった。本当に「これでも辞めないか。これでも辞めないか」と煽られているような状態だった。

そして、私の霊的感触からすると、その「仕事を辞めよ」と煽っているのが、運命であり天意であることは疑いようもなかった。要するにそれは「霊的な辞職勧告」であったのだ。

結果として、私は施設に退職願を出すことにした。現在も仕事は続けているが、二〇二四年の四月には退職するつもりである。

それは一家の生計を支える者としては空恐ろしいことであるが、宗教家としては必然的なことである。宗教家としての私は天意に逆らうことが出来ないし、そのようなことをするつもりもない。

天意が求めることに従順にしたがうこと。運命が引き起こす波に対し、熟練サーファーのように、逆らうことなく上手に便乗すること、それが私にとっての「信仰」であるからだ。

読者は、これを「自主性がない」とか「受動的すぎる」と思われるだろうか。

だが、かつてアブラハムは、信仰のために、自身の愛息でさえ神への生贄にしようとしたのだ。私にそこまでの恭順が出来るかは分からないが、それでも出来うるだけの従容の態度は示したいと考えている。

それにきっと、私の人生においても、これから何か大きな動きが生じるのだろうと、そのように思わずにはいられない。

福音書シリーズのアップロードが完了したこのタイミングで、天からの「辞職勧告」が与えられたこと。それは実に暗示的なことだと思うのだ。

第2章　アレゴリー（寓話）

女性的な理念

第1章において「二〇二三年六月に行われた、施設の全体会議を中心に、その前後、連続して『大淫婦バビロン』についての啓示が降ってきた」と書いた。

改めて言うが、この大淫婦バビロンとは『ヨハネの黙示録』に出てくる言葉である。その具体的内容については、本書の第十二章で取り上げることになるだろう。

ともあれ、私は施設の会議において、この大淫婦バビロンの姿を見たのである。

と言っても、誰か特定の女性を前にしながら「彼女が大淫婦バビロンだ」と視認したのではない。そうではなく、私はこの会議を通して、ある一つの「女性的な理念」を見たのである。

そして、その女性的な理念こそは、まさしく「大淫婦バビロン」と呼ぶに相応しいものだったのだ。

比喩的な表現となるが、私が見た「大淫婦バビロン」とは、次に掲げる寓話のようなものである。さしあたって読者は、その寓話の主人公（女性）をして「彼女が大淫婦バビロンである」と考えてくれればよい。

ウサギとトラの寓話

ある小さな島でのことだ。

そこで可愛らしいウサギが、獰猛なトラに食べられようとしていた。

この情景を、ある女性が見ていて、泣きながら「とても見るに堪えない。ウサギが可哀そうで仕方ない」と口にした。

ところが、彼女のとなりには、同じ情景を見ても、まったく微動だにしない男性が立っていた。彼は、トラに食べられようとしているウサギを助けるでもなく、ただじっとそれを見つめていた。

このような男性の態度に気づくと、女性はこれを恨みに思って強く言った。というのも、ついにウサギは、トラに食べ尽くされてしまったからだ。

「どうしてあなたはウサギを助けてあげなかったの？　本当に残酷なことだわ。ウサギは食べられてしまった。ウサギを助けてあげなかった、あなたのせいよ」

自然の摂理の尊重

右の寓話を見ると、たしかに女性は優しく、男性は残酷に感じられる。

だが、こう考えたらどうだろう。すなわち、このとき男性は「食物連鎖」という自然の摂理を念頭に置きながら、目前の情景を見据えていたのだと。

食物連鎖の考えからすれば、トラがウサギを食べることは正しい、あるいは順当なことである。それが人間的な感覚からすれば、いかに残酷なものに見えたとしても、だ。

なぜならトラがウサギを食べることは「地球の生態系を保つため、肉食動物が草食動物の数を減らしている」ということの一事例に過ぎないからだ。

こう言っても読者は納得できないだろうか。ならば仮に、この情景を「残酷な悪いこと」として、自然界から排除してしまったらどうなるだろう。

たとえば人間たちに「トラがウサギを食べようとしたら、その時にはトラを駆除して、つねにウサギの命を守らなくてはならない」という法令を出すのだ。そうしたら島の今後はどのようなものになるだろう。

その場合、トラに捕食されることがなくなったウサギは、まずその個体数を減らすことがなくなる。

そして、それからは徐々に「個体数の増加」が始まることだろう。ウサギたちは安心して餌となる草木を食べ、安心してさらなる倍々的繁殖を繰り広げるのだ。もともとウサギは繁殖力が強い動物である。

さりとて、それは生態系のバランスを無視した「不自然な」ウサギの個体数の増大に他ならない。

そうであるため、この島の草木は、本来的なペースを遥かに超えて、早く、残さず、数多のウサギに食べられることになる。そのようにならざるを得ない。

そして、このような流れの帰結こそは恐ろしい。そのとき生じるのは、ウサギに喰い尽くされることによって、まったく草木が見当たらなくなった、丸裸の島の景色だからだ。

むろん草木がなくなれば、ウサギたちはおろか、そのウサギたちを餌にしていたトラなどの肉食獣、ひいては人間までもが餓死で滅びてしまうだろう。それは、一つのカタストロフィー（破滅）である。

考えの深浅

そして、このような未来が見えていたからこそ、あの薄情そうに見えた男性は「トラがウサギを食べている残酷な場面」を黙ってじっと見ていたのである。

つまり、あの一見すると残酷なシーン（＝トラがウサギを食べるところ）は、実際には、生態系に即した「そうあるべきシチュエーション」だったのだ。それは、誰であっても口を差し挟むべき状況ではない。

換言すれば、食物連鎖という自然の摂理を知っていた彼には、もしその摂理を破れば、島が右に見たような破滅に至るということを、容易に想像することが出来たのである。だからこそ彼には、黙ってこれを容認するしかなかった。

しかし、女性のほうは、明らかにそこまでの深慮がなかった。そこに両者の考えかたの深浅差がある。

つまり彼女は、ただ人間的、感覚的な次元でのみ、男性の態度を残酷なものであると断定したのだった。

その上で「ウサギの生命に対して、男性の態度はあまりに無責任である」と判断を下した。彼女は、その先にある未来など何も見ないでそうしたのである。

第3章　現象世界における不都合

老人介護への適用

前章で語った寓話を要約して、もう一度見てみよう。

可愛らしいウサギが、獰猛なトラに食べられようとしていた。

この情景を見ていた女性が、泣きながら「とても見るに堪えない。ウサギが可哀そう」と言ったが、彼女のとなりには、同じ情景を見ても、まったく微動だにしない男性がいた。

この男性の態度に気づくと、女性はこれを責めて言う。

「どうしてあなたはウサギを助けてあげないの？　本当に残酷なことだわ。ウサギは食べられてしまった。助けてあげなかった、あなたのせいよ」

この寓話は、老人介護の現場にも適用することができる。

それはこういうことだ。

とある「要介護状態にある老人」が亡くなったとき、そのことを知って「その老人が死んでしまったのは可哀そう」と言って涙ぐむ女性がいたとしよう。

しかし、その女性の隣には、同じ老人の死を、ただ黙って見ている男性の姿がある。彼はまったく微動だにしない。そのような状況を想像してみてほしい。

そのうえで女性が男性に言う。

「あなたが助けてあげていたら、まだ、あの老人は生きながらえていたはずよ。私はあの老人に生きていてほしかった。あの老人が死んでしまったのは、助けなかったあなたのせいよ」

介護が要る老人の場合

今の寓話を、具体的な事象に置き換えたいと思う。ただしここでは、あえて霊的な観点には触れず、現象世界（この世）にのみ限定した話をしようと思う。

そのような限定を設けた上で言うのだが、寓話に出てきた女性の望みを、まさに彼女の望みどおりの形で叶えたとしよう。すると果たして、そこからどのような結末が導かれることになるだろう。

まずさしあたって、女性の望みどおりに、一人の「自活能力を失った老人」が長生きしたとする。そうすると、そのとき老人は、社会的に「要介護老人」と呼ばれることになる。

というのも、要介護の認定が与えられるということは、その老人が「自分自身の能力と責任のもとに、

日々の生活を送ることが出来ない」ということを意味しているからだ。
つまり要介護とは「介護が要る」という文章を短縮したものなのだ。
したがって、この老人の生命を持続させるためには、どうしても彼を介護する人員を確保しなければならなくなる。それが家庭のことであれ、施設のことであれ、そこに「老人介護に時間を費やす人間」が必要になるということだ。
そして、ここが何よりも重要なことなのだが、この介護の仕事に「生産性」にあたるものはないのである。
まずここには当然、何かモノを作って売り出し、それに対する対価を得るという形式はない。これは、そこに実体経済がないという文言にも言い換えられよう。
また、施設等の介護によって老人が元気になり、そこから社会に労働力を提供できるようにまで回復する、という筋書きを描くこともまずない。
なかんずく、介護対象の老人が認知症に罹っていたとしたら、彼を「治癒と回復」の流れに乗せることは、もはや絶望的なまでに無理な話となるだろう。

要介護老人を支える人々

そのように生産性がなく、対価を獲得できるアテがない場合――それでもなお介護のシステムを維持しようとすれば――その資金調達は、結局、共同体からの拠出に頼るしかないことになる。つまりは、税金の中から維持費を捻出するしかないということだ。
そして、この税金を払わされるのは、実際にそれを払うことが出来る「現役世代」ということになる。この現役世代という概念を、ここでは最大限に大きく取って、だいたい二十代から七十代ぐらいだとしておこう。
彼らが払う、老人介護のための税金は、介護保険料とか年金とか呼ばれている。これらは、システム上は税金と呼ばれていないが、実質的には税金以外の何物でもない。
いちおう税金扱いされないのは、表向き、現役世代が高齢になったとき、それらが還付されることが約束されているからだ。つまり一時預かり金ということである。
たしかに、徴収の対象が現在六十代や七十代ならば、その払った金額に見合っただけの年金や、老年期の介護が受けられるかもしれない。あとは四十代や五十代にも、わずかながらそうなる可能性が残っている。
しかし、どう考えても払った年金が戻ってこない、二十代から三十代の若者世代こそは、いい面の皮だ。
彼らが老人になる頃には、年金制度や介護老人制度は、まず間違いなく破綻していることだろう。そして、破綻したシステムが「借りた金を返す」などという殊勝な心掛けを発揮するわけもない。

若者たちの自由を奪う老人介護

もっとも、現在の年金機構は、若者世代に対して「安心してください。払った分は、ちゃんと還元してもらえますよ」とアナウンスしている。しかしながら、その必死で声高な態度は、むしろ彼らの自信のなさを露呈させるものになってはいまいか。

なにせ日本年金機構は「使い込み」さえしている犯罪組織なのである。いわゆる「消えた年金」の問題だ。そんな彼らに、いっぱしの自信があるはずもない。

単純に考えても、今後、払う現役世代よりも、使う老年世代のほうがずっと多くなるのだ。そのような流れにあって、現行の年金システムが堅持されるはずがない。つまり国民年金等で徴収された財源は、どこかの時点で「使い尽くされる」しかないのである。

ゆえに若者世代、二十代から三十代の若者たちの場合は、まさしく「お金を払うのは自分たちで、お金を使うのは老人たち」という単純な図式が成立してしまうことになる。

こうなったとき、若者たちが背負う、心理的、実質的な負担はいかばかりだろう。そしてそれは、いかばかりに理不尽なものだろう。

現時点であっても、若者たちは「どうしてこんなに税金が高いのだろう」「どうしてこんな、戻って来るアテのない金を払わなければならないのだろう」と嘆かざるを得ない状態にある。

なにせ、いま（令和五年）三十五歳未満の若者たちは、月に一万六千五百円もの国民年金を払っているのだ。昭和四十年頃には、それはたったの百円だったのに。

そのように税金による支出が増えてゆけば、若者たちの生活上の自由度は、相対的に下がってゆくことになる。平たく言えば、やりたいことも出来なくなる、ということだ。

何より若者たちにとって「自分たちの夢を叶えること」が難しくなってくる。そのような事態が引き起こされる。つまり自分たちの未来、自分たちの夢のために投資したいと思っている金銭が、いつの間にか税金に吸い尽くされてしまうのである。

もちろん税制の中にも生産性は存在する。すなわち、税金を投入することで産業が育成され、そうして大きくなった産業が次の税収を生む、という形だ。こうした流れが一応「税制の生産性」と呼べるものである。

しかし介護老人制度には、そのような「産業の育成」も「税収の拡大」も存在しない。税金のほとんどは、ただ老人たちの延命に喰い潰されるだけのものとなるのである。

そのため現時点でも、若者たちの閉塞感は、未来への不安と一緒になって、彼らが抱えきれないほど大きなものになっている。

ヤング・ケアラーの問題

若者たちにのしかかる「要介護老人による負担」の増加問題。この問題の最も深刻なところでは、若者への介護負担が、もはや「直接肌に触れるもの」にすらなっている。彼ら若者たちの一部は、老人介護

の「直撃」を受けることになるのだ。

というのは、少なからぬ家庭において「要介護老人と若者しか存在しない」というシチュエーションが現出しているからである。いわゆる「ヤング・ケアラー」の問題だ。

そこには極めて悲惨な情景がある。すなわち、そうした「要介護老人と若者しか存在しない」家庭においては、体を動かせない父母や祖父母を、まだ未成年であるところの、子や孫が直接的に世話しているのである。

しかも、ここに見ている若者たちは、一日の大半を、その老人介護の実施に費やさなくてはならなくなっているのだ。そんな彼らにあっては「夢の現実化のために自分の時間を作ること」など、まさに夢物語でしかない。

それどころか彼らは、学校に登校することすら難しい毎日を送っているのである。

こうした若者たちの姿と、ただ延命しているだけの晩年を送っている老人たちを見比べたとき――それについて、

「これは何かがおかしい。何かが間違っている」

と矛盾を感じない人がいるならば、その人の感性のほうが、むしろ幾分か歪んでいるのではないだろうか。

第4章　この世界は誰のためのものか

社会的な生態系の破壊

前章のような現状を見たとき、私の心には、どうしても次のような疑問が湧き上がってきてしまうのだ。すなわち、

「自活能力を失った老人たちの介護を『延命』までして継続することは、はたして正当と言えるだけの意義を持っているのだろうか」と。

あの寓話に即して言えば、これは「ウサギのように可愛い老人を、死というトラから逃れさせること」にあたるはずだ。

よって、かの優しき女性は「延命」に満足するだろう。だがそれは真の意味で正しいことなのだろうか。

それはもしかしたら、食物連鎖の摂理を無視してまで、自然環境に「無用な優しさ」を当てはめてしまったのと同質の愚行なのではないか。その愚行によって、私たちは共同体という生態系を、無意識のうちに破壊してしまっているのではないか。

そうだとすると、ウサギに喰い尽くされた草木は、ここでは大勢の被介護老人に使い尽くされた、年金基金や介護保険料に当たるだろう。

そして金銭的に「不毛の大地」となってしまった国家予算のなかで、若者たちは、自分たちの生活資金すらも失ってしまうのだ。当然そのような状態では、未来や夢を心に描くことは、ことさら困難なことになってしまう。

これは本質的には、社会的なカタストロフィー（破滅）だと言っていいと思う。

圧死する若者たち

しかも、これは想定ではなく「現状」なのである。なぜなら介護保険制度は、すでに現役世代を疲弊させ、日本の国力を低下させているからだ。

いまや税金（年金）は目玉が飛び出るほど値上がりし、しかもその高額の税金は、要介護老人たちを延命させるために喰い潰されている。

本当に若者たちの「現在」は、老人たちの生活を支えるために、今にも押しつぶされようとしているのだ。しかも、彼ら若者たちが経済的に圧死してしまったら、近未来の日本社会そのものまでが潰れてしまうことになる。

以上のことを念頭に置いたうえで、改めて自分たちに問いかけよう。

どうして介護保険制度は、こうも人間社会に大きな負荷を与えずにはおかないのか。どうして介護保険制度は、その内部でも「うまく運営されないこと」が多いのか。

それは介護保険制度が「食物連鎖からの逸脱」と同等の「人間社会の摂理からの離反」を孕んでいるからなのではないのか。あの寓話で「トラに食べられるウサギは可哀そう」と言って泣いていた女性が象徴するように。

この世界は若者たちのためにある

いまや私は、次のような問いを立てずにはいられない。この世界（人間社会）はいったい誰のために存在しているのだろうか、と。

もちろん当たり障りなく「この世界は、すべての人々のためにある」とでも答えるのは簡単だ。これなら誰も傷つかないし、誰からも批判されないだろう。まことに優しい答えに違いない。

しかし私は、あえてそれを「この世界は若者たちのためにあるのだ」と答えたいのである。あえてそのように断定したいのである。

なぜなら若者たちは、現在以降の長い時間を、この世界に留まって「自らの積極的な活動期間」にすることが出来るからだ。つまり彼らは、長きにわたる人生を使って、この世界を「より良いもの」に創り変えることが出来るのである。

少なくとも彼らは、そのような事が出来るという「可能性」は持っている。

そして、この可能性を持っているかぎり、若者たちにとり「この世界で生きること」は当然の権利とな

るし、また同時に強制的な義務ともなる。彼らは歓びながら生きて、あるいは嫌が応にでも生きて、何としても、この世界を改善していかなければならない、そういうことだ。

一方、そのような若者たちの存在形式に比して、老人たちの大多数は、この世界を改善させるための時間と能力を持っていない。

老人たちは、明らかにそれを持たない。その寿命が短いことに加えて、彼らは大きな変化を好まないからだ。老人たちに残された僅かな時間は、積極的で肯定的な「変化」とほとんど無縁なのである。

ことに認知症にかかっている老人の場合は、積極的、肯定的な変化と「全くの無縁」と言い切ってしまうことも出来る。というのも、彼らの多くは「完全なまでに前日と同じ内容の今日」を毎日のように繰り返すからだ。

仮にそこに変化があるとすれば、ただ衰微のみである。そうして間もなく、老人たちは死に飲み込まれる。それだけが、彼らに与えられた「変化」なのである。

東日本大震災でのこと

ここで一つ思い出ばなしをしたい。二〇一一年、三月十一日のことである。

この日、あの東日本大震災が起こった。私が住んでいる茨城でも大きな地震が起こり、建物や塀の多くが半壊、あるいは全壊した。福島県沖ほどではないにしても、海岸では津波が街を水浸しにした。

私はこのとき既に介護の仕事に就いていた。しかも、地震が起きた時間帯にも施設で働いていた。私が当時働いていたのはグループホームである。

グループホームとは、認知症でないと利用者として入所できない、小規模多機能の介護施設のことをいう。

さて、私たちのグループホームでは、地震による、直接の死者や怪我人は出なかった。

それ自体は幸いなことだったが、その後すぐにライフラインがストップ。水も電気もガスも使えなくなった。

施設はどんどん不便になり、またどんどん薄汚れていった。まさに非常事態だった。

最初の地震から数日後、そんな汚れた施設のなかで、経営者が次のようなことを言った。

「また地震が起こるかもしれない。そのとき生命の危険を感じたら、君たち職員は、迷わず利用者さんたちを捨てて逃げなさい。

利用者さんたちは、すでに十分に、この世で生きてきた人たちだ。けれど君たち職員たちは違う。君たちは、これからも長く生きていかなくてはならない人たちなんだ」

この経営者の言葉は、私の胸の奥底まで突き刺さった。この言葉の内容に、ある種の感動すら覚えた。

これを言った経営者が、普段は「利用者ファースト」の姿勢を貫いていた人だったから、尚更だったのかもしれない。そのギャップが私の心を動かしたというわけだ。

こうした事情のため私は、それ以来、何度もこの言葉を思い出すことがあった。

残酷に見えたとしても

実際、かの経営者の言葉には、一見残酷なようでも、そのじつ誰もが「腑に落ちる」と言わざるを得ないような「人間の真実」が込められている。

それは大災害によって、人々の心が極限状態にあったからこそ、心の深層から浮かび上がってきた真理だとも言えようか。

老人たちを捨ててでも、若者たちは生き残るべきである――

そうなのだ。私たちは、心の底では「この世界は若者たちに明け渡すべきものであること」「この世界は若者たちのためにあること」を本能的に知っているのだ。

そうであるならば、今ここで――つまり本書において――あの経営者と同じことを言ってはいけないという法はあるまい。東日本大震災のときほど分かりやすくはないが、現在もまた、社会システムが、危機的状況に陥っていることは確かなのだから。

そもそも、共同体とか社会と呼ばれるものは、人間にとっての生態系そのものなのだ。

それは生と死が織りなす「自然の摂理」を形作っている。あの食物連鎖と同等な、自然の摂理を形作っている。

その摂理を尊重するならば、たとえ感覚的には残酷に見えたとしても、私たちは黙って「老人たちの自然な死」を迎え入れなければならない。

もしそれが「延命」の範疇に入ったならば、私たちはもう老人たちの生命を救ってはならない。湧き上がる「救いたい」という気持ちを押しとどめなければならない。

というのも、延命状態にある老人を救うことは、イコール「救われない若者たち」を生み出す行為となるからだ。つまりそれは若者たちから、世界と未来を奪う「不自然で不要な行為」となるのである。

第5章　命の価値の差異

姥捨て山の思想か

前章のような考えを表明すると「それでは、いくら何でも老人に対して酷だ。まるで姥捨て山の思想ではないか」と読者からなじられそうだ。さてどうしたものだろう。

いや、よく考えてみれば、それはそれで都合が良いことかもしれない。このさいだ。ここでは「姥捨て山」の物語を題材にして、介護老人の処遇について検討をしてみよう。

混乱を招く前に釘を刺しておくが、多くの昔話がそうであるように「姥捨て山」の話にも、いくつかの異なったバージョンがある。だから一概に、読者と私の「姥捨て山」の話が一緒のものであるとは限

らない。

そうした事情の中で、私が知っている「姥捨て山」のストーリーを紹介すると、それはは次のようなものになる。

――飢饉の時代にあって、寒村の若い衆が、役立たずの老人たちを、特定の山に捨てにいった。この特定の山というのが「姥捨て山」である。

もっとも、若い衆は好んでそんなことをした訳ではない。狭量な領主に命じられて、嫌々ながらそれをしたのである。この領主の布告によれば、たとえ親であっても、一定年齢を超えたら、その山に捨てに行かなければならなかった。

ただし、物語としては、ここから逆転劇が付加されることになる。すなわち、捨てられそうになった老人のなかに、若者にも負けない知恵者がいたのだ。

そして、この老人の知恵が、一度ならず寒村の危機を救うことになる。その結果として、山へ老人を捨てにいく制度は廃止されることになった。

だから「姥捨て山」の物語には、最終的に「老人たちを邪険にせず、大切に扱いましょう」というメッセージが込められているという事になるだろう。

中立的な老人観

右の「姥捨て山」のストーリーに当てはめれば、私は、老人たちを山へ捨てることを村人たちに強要した「狭量な領主」の立場に身を置いていることになる。私はこれまでずっと、老人介護の意義を貶めてきたのだからである。

しかしながら私にも抗弁したい点はある。

というのは、私のなかでは、物語に出てくるような「知恵者の老人」は、すでに老人の括りの外側にいるのである。私のなかの定義では、あの知恵者の老人は、むしろ「若者」のカテゴリーに含まれることになるだろう。

つまり、私が老人と呼んでいるのは「いわゆる老人」の皆さんのことではないのだ。単に高齢であるだけの人物、つまり「年齢的に老年期にある人間」に対しては、私は中立的な視点しか持っていないとすら言える。

というよりも、私は「老人好き」ですらあるのだ。私は知恵者の老人というか、よく言われるところの「老巨匠」のタイプが好きで、それはもう「愛惜置く能わざる」というレベルですらある。

たとえば、指揮者の朝比奈隆氏や、評論家の渡部昇一氏、音楽家の宇野功芳氏など、本当に日頃から、心よりご尊敬奉っている。この方々の音楽や書籍を、ほとんど宝物のように思っている。もっとも、ここに挙げた方々は、今では一人残らず鬼籍に入られてしまったが……

ともあれ、そんな私が呼びならわす「老人」が、単なる高齢者を指すものである訳がないのである。

私にとっての「老人の定義」

ここで整理しておこう。私が本書的に「老人」として念頭に置いているのは、まず第一に「他人のために自分を役立てようという意志を持てない者」のことである。

これにもう少し言葉を足すと、まずもって彼らは自分のことしか考えられない。たとえ他人のことを考えているそぶりを見せても、それが本質的に、自己満足のお節介にしかなっていない。そういうことになる。

逆に、先ほど名前を出した、指揮者の朝比奈隆氏や、評論家の渡部昇一氏、音楽家の宇野功芳氏などは、自分の技量や知見を、いつも人々の役に立てようと努力なされていた。そして私たちも、彼らからの恩恵を確かに受け取っていた。

だから彼らは、私のなかでは、まったくもって「老人」の定義には当てはまらない。彼らは高齢であるけれども、人間としては誰よりも若い「若者」なのである。

それはさておき、もう一度確認しておくが、本書的な老人とは、まず第一に「他人のために自分を役立てようという意志を持てない者」のことである。

そして本書的な「老人」とは、第二に「そのようなマイナスの性情を、自己変革しうる可能性を持っていない者」のことである。

これこそは、世に広く見られる、いわば「老年期の呪い」であろう。

というのも老年期にある場合、自分を変えようにも、ほとんどの人は、そのための意志も能力も時間も「欠如か、あるいは大幅な不足の状態」に陥ってしまっているからである。

認知症の老人たち

「1. 他人のために自分を役立てようという意志を持てない」

「2. そのようなマイナスの性情を、自己変革しうる可能性を持っていない」

これが私が考える「老人」である。そして、この二つの「本書的な老人の定義」にピタリと当てはまってしまうのが「認知症の老人たち」なのである。

順序が逆になるが、まず第二の定義に抵触することを検討しよう。

してみると、この人たちは、自分の精神状態を変革できる可能性を持っていない。認知症はまさに不治の病であり、ことに重症になればなるほど厳密にそうである。

多少具体的に言えば、次のような話が出来るだろう。

すなわち、ほとんどの認知症患者は、その病状として「記憶障害」を持っている。

そして、その記憶障害のため、彼らは、前日、一時間前、三分前、あるいは一分前のことすら記憶するころが出来ない。換言すれば、前日、一時間前、三分前、あるいは一分前の出来事も、自分の経験にすることが出来ない。

このため彼らは、毎日、毎時間を「同じような内容で、ひたすら、繰り返しループする」という形で過

ごさざるを得ない。彼らには「情報の積み重ね」ということが出来ないからである。

こうして彼らは、成長とか変革といった概念と絶縁状態になる。成長とか変革には、明らかに「前の状態の乗り越え」というニュアンスがあるからだ。

前の状態という情報をインプット出来ないならば、その状態を乗り越えることも、また出来るわけがない。したがって彼らは、厳然たる事実として「自分を変えるための意志も能力も時間も持てない」ことになるのである。

他人を使役せずにはおかない症状

そして彼らは――第一の定義に抵触することとして――とにもかくにも、周囲の人間を「自分たちの世話」に駆り立てずにはおかない。ちなみに第一の定義とは、

「他人のために自分を役立てようという意志を持てない者が老人である」

ということだった。

しかして認知症老人は、実のところ、常時、自分のために他人を使役せずにはおかない。そしてその状態は、彼らが死ぬ日まで、ずっと休まず続くことになるのである。

したがって、彼らの場合は「他人のために自分を役立てようという意志を持てない」どころの話ではないのだ。認知症患者とは、第一の定義を、極端なまでに深刻化させた「自分のために他人を使役し続ける老人」ですらあるのである。

事実、自分の命を長らえさせるためには、認知症患者は、他人からの介護を受けない訳にはいかない。しかも世話する側にとって、とてつもなく重い負担となる介護をである。

だから自然と、私は、主に認知症の老人たちを念頭に置きながら「老人」という言葉を使っている。彼らが、第一の定義と第二の定義を、まさに十全なまでに満たしているからである。

逆に言えば――確認になるが――たとえ高齢者であったとしても、彼が他人のために生きようとするならば、私は彼のことを老人とは呼ばない。

あまつさえ、その行為が自己満足に留まらない成果を上げるならば、私はなおのこと彼を老人などとは呼ばない。

そしてまた、彼らが要介護状態からの回復能力、あるいは回復する可能性を持っている場合もまた、私は彼らのことを「老人」と呼ぶつもりがないのである。

命の価値の差異

ところで、右に見たような「老人（認知症患者）」の命と、若者たちの命を並べると、私はそこに断絶的なまでの「価値の差異」を見ないわけにはいかなくなる。

すなわち私は、一方の老人の命を「今後も存続するには、あまりにも価値の低いもの」と評価し、もう

一方の若者たちの命を「今後も存続すべき価値の高いもの」と評価せずにはいられない、ということだ。

このような考えに対し、ただ一途に気分を害する読者も多いだろう。むろん私は、それを覚悟の上で発言をしているのだが。

ただ読者には知っていてほしい。その不快な感情の発生には、あのマルクス主義が影響しているのだということを。

マルクス主義の場合、その労働価値説からも分かるとおり、すべての命は等価である。あるいは等価にしたいと思っている。

労働価値説とは、要するに「ある単位あたりの労働力は、それが誰であっても、おおよそ一律に換算してよい」という考え方のことだ。

しかも、マルクス主義の支柱は「死んだら全て終わり」の無霊魂説である。だから、若者の命だろうと、老人たちの命であろうと「それが死んだら無となり霧散してしまう」という点で等価値ということになる。

無神論の宇宙、有神論の宇宙

こうした考えの影響を受ければ、当然、命の価値に差異があるという発言は、誤り、間違いにしか聞こえなくなってしまうだろう。

実際マルクス主義を淵源とする左翼思想にどっぷりと浸かった日本では、私が言うような「命の価値の差異」は、差別的な悪いこととしてしか認識されまい。

しかし、命の価値の平等は、真実の世界、すなわち「有神論の宇宙」の現実とは、決して重なり合わない考えである。

この有神論の宇宙については、次の章から、その実像を述べていく。

だが、ここでも最低限「真実の世界では、命の価値に、大きな差異が生まれるのだ」ということだけは断言しておきたい。

すなわち現時点においても「若者と老人の命には、その『この世で存続されるべきか否か』について、大きな差異があるのだ」ということだけは断固訴えておきたいのである。

第二部

第6章　現象としてのタナトス

タナトスとは何か

ここからは、霊的な世界観を踏まえて、老人介護の現場について眺めたい。とりもなおさずそれは、有神論の宇宙のなかで、老人介護の現場を検証したいということでもある。

結論から先に言うと、認知症の老人たちは、みずから自分自身の死を求めている。そのような現実がある。そして私は、この老人たちの欲求を「タナトス」と呼んでいる。

ここで早速、拒絶反応を示す読者も出てくるだろうが、まあ今は我慢して聞いてほしい。

もともとタナトスは「死」を擬人化した、ギリシア神話に出てくる神さまの名前だ。

神々の系譜としては、ニュクス（夜）の息子であり、ヒュプノス（眠り）の兄弟だと言われている。

こうしたタナトスを「死への欲求」と解釈して論じたのが、心理学者のフロイトだった。フロイトは、自身の著作の中で、エロス（生）の本能と、タナトス（死）の本能が、無意識のうちに表裏一体を成すといった、非常に難解な考えを展開していった。

しかし、ここでは、そのように難解な理論に立ち入る必要は全くない。なぜなら私の言うタナトスは、フロイトのそれとは、まるで違った内容の概念であるからだ。

というより、フロイトと私のタナトスは、ほとんど無関係に近い。ただ「タナトス＝死への欲求」という最初の解釈だけが、かろうじて同通している、それだけの話なのである。

ともあれ、このタナトスがどうやって生まれるのか、どうして生まれるのかについては、次の章から論じることになる。

ここではまず「タナトスが、どのような形で老人介護の現場に現れるのか」について、その実際のところを報告しておきたい。認知症の老人たちは、はたして、どのようにして「自らの死」を求めるのだろうか。

食事拒否に見られるタナトス

そうしてみると、最初にくる代表的な一例は「食事拒否」ということになりそうだ。

これは大変分かりやすいタナトスの事例である。生き物としての人間が、自身のエネルギー源である食物を摂取しなくなったら、いつかは死んでしまうのは当たり前のことだからだ。

このような状態を、医学的には食欲不振と呼ぶのだろう。しかし霊的視点から見れば、やはり「食事拒否」と言ったほうが正確なものになる。老人たちは、タナトスに促されて、無意識的な自殺をしているのだからである。

それはさておき、認知症の末期にあっては、患者は「食べる」という行為自体が理解できなくなる。口を開くことも、咀嚼することも、自分では意味不明の行為になるのだ。

しかし、そこまで行かなくとも、病状が進行していく過程のある時点から、認知症の老人たちは、次第に「食べる」という行為を放棄するようになる。彼らは、誰かが口元に食べ物を差し出せばこれを食べるが、そうでない限りは何も食べようとしない。

そのため医療現場（病室）や介護施設では、この時点から「食事介助」という介護行為が始まることになる。つまり看護師や介護士が、老人の口に、スプーン等で食べ物を運ぶのである。

これは看護師や介護士にとっては、日常的にみられる職務の一環である。

だが当の老人にとってはどうだろう。それは自身に現れた「タナトス」を阻止するものであり、ゆえに自身の欲求を阻止する「余計な行為」であるのかもしれない。

というのも、食べなければ餓死するのは必定であるが、老人たちはまさに、この餓死をこそ求めているのだからである。彼らはタナトスに迫られ、自ら「飢えによる死」を求めているのである。

タナトスは、次章で見るように「霊的世界における自然の摂理」である。よって食事介助によるタナトスの阻止は、自然の摂理（理法）から外れた違法行為ということになるだろう。

あまつさえ、終末期の老人には「栄養を補給しても、その栄養を活用することが出来ない」そういう現実すら課せられている。要するに彼らは、いくら食べても痩せ細るのだ。これは医学的事実である。であるとすれば、食事介助の意義とは一体何なのだろう。

徘徊に見られるタナトス

次なる「タナトスの表れ」の代表例は「徘徊」である。

徘徊とは、主体がどこともなく歩き回ったり、這いまわったりすることを言う。

事実、認知症の老人たちは、衝動的、無目的に立ち上がっては、這ってでも動き回ろうとする。たとえ骨折していても歩こうとする場合もある。

介護の教科書には、この徘徊には、ちゃんとした目的があるのだと書かれている。もちろん「本人にとっては」という限定付きであるが。いわく、家に帰ろうとして、子供に会うために、などなど。

しかし、タナトスの意義を認めるならば、それらの目的は、あらずもがなの目的を、むりやり状況に当てはめているものに過ぎないものとなる。

つまり、その目的が当の老人にとっては重要であったとしても、総合的な判断からすれば、それは結局のところ二次的、三次的なものに留まるだろう、ということだ。

では第一義的な「認知症の老人たちが徘徊する理由」とは何だろう。

もうお分かりだろうが、その答えは「事故によって死ぬため」である。

家庭や施設内において、老人たちは徘徊のための「立ち上がり時の転倒」や「車椅子からの転落」などで「事故→怪我→死亡」のレールに乗ることが出来る。

実際、元気そうに歩いていた老人が、転倒骨折を機に、一気に生気を失っていく姿は、介護の現場では、よく目にするケースである。

だが、とりわけ劇的な「死へ続く徘徊」といえば、何より施設や家屋からの脱走だろう。

私も何度か目にしているが、認知症の老人たちは、本当に必死になって屋外へと脱走しようと試みる。それがどんなにグロテスクな結果をもたらすかも知らないままに。

認知症の老人たちが、その脱出によって到達することになる外の世界――

そこは車が縦横に走っている道路であり、彼らにとっては、自己の生存を保つのが極めて難しい環境である。事実、ここまで到達したとき、老人たちには、かなり高い確率での「交通事故による死」が待っている。

その死体は、多くの場合、見るも無残な出血に染まることになるだろう。まことに目も当てられない姿である。

けれども、老人たちを突き動かすタナトスは、それでも一途に、このような結末を求めているのである。

現象としてのタナトスの本質

むろん、タナトスの表れは、食事拒否や徘徊に留まらない。自傷行為や異食（食べ物以外のものを食べること）など、場合によっては死に至る行為は、他にもたくさんある。

しかし、ここでそれらを詳しく枚挙していくのは、おそらく場違いなことだろう。

そこでここでは「こういった類の現象であれば、それはタナトスの表れとして捉えてよいだろう」という原則だけを示しておきたい。

そうしてみると、総じてタナトスの表れとは「他人からの助力が介在しないと、自分自身の生命を存続させられない状態にすること」になるだろう。

つまり「老人本人だけがそこにいると、ほどなくしてその命が失われることになる」というシチュエーションが、その老人にタナトスが干渉していると言える状態なのである。

これを先の二つの事例に当てはめれば次のようなことになる。

食事拒否をしている老人の場合、食事介助をする他人が介在しないかぎり、その老人の命はほどなくして、餓死の形で失われることになる。

徘徊している老人の場合、その徘徊を止める他人が介在しないかぎり、その老人の命はほどなくして、転落事故、転倒事故、交通事故の形で失われることになる。

それらはまさに、老人にとって「他人からの助力が介在しないと、自分自身の生命を存続させられない状態にすること」であろう。

そして、そうであるならば、あとはこの形式を、自傷行為なり異食なり、ほかそれに類する現象に当てはめて検証していけばよいのである。きっと、それによって数多くの「タナトスの表れ」が見つかることだろう。

他人の介在とは延命のこと

ここで言う「他人の介在」とは、要するに「タナトスの阻止」と同じことである。

そして、もしもタナトスの表れが自然の摂理であるならば、それを阻止することは、自然の摂理に反した行為であるということになる。

そしてこの行為は、一般に「延命」と呼ばれている。

私は、この延命を「人間社会にとって全く不必要なものである」と考える者である。もっとシンプルに言えば、延命は「決して、してはならないこ」とだと思っている。

だが、それを高らかに宣言するのは、次の章で、タナトスの霊的な実相を明らかにしてからにしよう。

今は、本章の最後として、次のことだけを注意喚起しておきたい。

それは、認知症の老人たちが、その表面的な意識の欲求としては、迷うことなく「生きること」「生き続けること」を求めているということである。

彼らは総じて死ぬことを怖がっており、ときには実際に「死にたくない、死にたくない」と声に出して唱えることすらある。だから「そういう老人たちにタナトス（死への欲求）などあるはずがない」と考える人もあることだろう。

だが、だからこそ、ここに注意喚起が必要なのだ。

なぜならタナトスとは、老人たち表層意識からではなく、彼らのもっと、ずっとずっと深いところから発せられる声だからである。

まさにそうなのだ。それは老人たちの表面的な声を意に介さないほど、深くて真実な世界から、朗々と発せられている声なのだ。しかもその声は、本心から「早く私を死なせてください」と訴えているのである。

そして認知症の老人たちの行動形態は、悲しいほど明確に、こちら（深層からの声）のほうを忠実に体現化している。もちろん、それこそが本章で見てきた「タナトスの表れ」に他ならない。

第7章　霊的観点から見たタナトス

霊体質者としての言葉

ここからは「霊的な世界観」を踏まえた上で、前章で語った「タナトス」を、あらためて検証していってみたい。

本章は一貫して霊的な話をすることになるので、まず最初に断っておこう。

私の霊的能力は、相も変わらず大したものではない。霊視は利かないし、霊聴もたまにしか聞こえな

い。霊能者として評価するなら、私は二流三流のそれでしかないだろう。

しかし、そうであっても、私は「自分が霊体質であること」は厳然たる事実として認めている。なにしろ、この文章を書いている前の夜にも、霊に直接背中を触れられていた（というよりは押されていた）感触があったぐらいだ。

その程度に「霊の動き」を感知する能力なら、私はつねに、この耳目に保持している。

ただ万全性に欠けるのは、その霊的な体質を、意図的、能動的に用立てる力（＝霊能力）に不足している点なのである。

ともあれ、そのような霊的水準にある人間として言おう。認知症の老人たちが、タナトスによって自分を死に向かわせようとしているとき、私はそこに確かな「霊の臨在」を感じるのだと。

そして、そのとき感じられる霊の働きは、明らかに老人たちを、意図的に「死後の世界」に引き寄せようとしている。つまりその際の図式は、霊が老人に対して「早くこっち（霊界）に来い」と引っぱりに来ているような状態なのだ。

それは大方の読者には信じがたいことかもしれない。

それでも仮にこれが事実であるとするならばである。はたして霊は、どうしてそのような促しをするのだろうか。

悪霊の仕業にあらず

おそらく皆さんは「老人を死後の世界に引き寄せている」という言葉を聞いた時点で、そのような働きを見せる霊を、何かしら怖いものだと感じたことだろう。すなわちそれを「怖い霊が何らかの悪さをしている場面である」と推察したに違いない。

しかしながら、そのような場面に実地に接している私は、このときの霊の働きに、不思議と、悪霊特有の匂い（雰囲気）を感じないのである。

たとえば一般的に「地縛霊」と呼ばれている悪霊がいる。自分が死んだ場所や、自分の思い入れが強い場所に縛られている、執着心の強い邪霊のことである。

そうした地縛霊は、自分の縄張りに人間が近づくと、問答無用にこれを排除しようと攻撃してくる。あるいは自分の仲間にしようと憑りついてくる。そして、その霊的な働きには悪霊特有の匂いが伴うので、私にもそれを感知することが出来るのである。

ところが、認知症の老人たちが、タナトスによって自分を死に向かわせようとしている場面では、私はその「悪霊特有の匂い」を感じない。そこに現れる霊は、確かに老人たちを、意図的に死に引き寄せようとしているのに。

ここに感じられるのは、よくも悪くもない、ごく中立的な霊の匂いである。そこには聖霊の温もりもないが、悪霊の寒気もないのである。

霊たちの働き

そうだとすれば、ここに現れている霊の働きは、悪霊によるものではなく「認知症老人たちの『守護霊』によるものである」と考えたほうが自然になる。

本書の読者であれば、きっと守護霊という言葉ぐらいは聞いたことがあるだろう。守護霊は、いわばスピリチュアリズム（霊的思想）のなかの有名人である。

しかし、かかる有名な守護霊であっても、その働きの実態については、かなり謎めいたところがある。それこそ「守護霊とは、いったい何から被守護者を守るものなのか」という基本的な問いにさえ、答えられる人は稀であろう。

むしろ今は、この点を話の糸口にするべきかもしれない。そもそも守護霊は、どうして現世にある人間を守ろうとするのだろうか、と。

してみると、まず初めに検討するべきは、守護霊の「守護」とは、いわゆる奉仕作業なのだろうか、ということである。

そもそも霊的な存在はあまたといる。人の数以上に霊的存在はいる。

そしてその中には、自身の利害感情を超えて、目前に困っている者があれば、即座にこれを助けようとする者がいる。まことの奉仕精神にあふれた彼らは、その純粋な愛ゆえに、天使とか聖霊とか呼んで然るべき霊である。そのように言えよう。

そして彼らの活動は、その愛ゆえに、霊的な光と熱を伴う。つまり、その臨在にあたって温もりを発するのである（ただし物理的に暑い日などには、清涼さとして感じられることもある）。

霊体質である私もまた、彼らの働きが現れれば、そのような温もりを感知することになる。

人間と守護霊とが一心同体であること

しかし前述のとおり、タナトスが働いている場面に現れる霊は、温もりも寒気も感じさせない中立的なものである。したがって、その働きは、純粋な奉仕精神によるものではないと考えられる。

とすれば、守護霊が人間を守護する理由は絞られていく。つまり、そこには一方的な奉仕状態ではなく、一種の利害関係があると想定されるのである。これをもっと正確に言えば、

「対象となる人間と守護霊とが、その利害を一致させている」

ということになるだろう。

そして、そのように利害が一致するということは、ここに次のような事実が秘められていることを予想させずにはおかない。

それはつまり、守護対象の人間と守護霊とが一蓮托生の関係にあり、さらに言えば、両者が「一心同体」に近い関係にある、ということである。

だが人間と守護霊が一心同体であるとは、一体どういうことだろう。

それを理解するためには、現世にある人間と、霊界にある守護霊とが、実はもともと一つの生命体で

あったと考えると分かりやすい。

イメージを固めるため――事実とは多少異なるだろうが――読者にあっては、ここに大きなお餅を想像してほしい。そして、そのうえで、この餅を切れないように長く伸ばして、最終的には、ちぎれてはいない二つの塊を作ってほしいのだ。

そうして、二つの塊のあいだに、木製の衝立を置くことにしよう。ただし衝立の上のほうで、いちおう餅は一つに繋がっている。なお二つの塊は、左右で分けるのではなく、前後で分けることとする。

となれば、衝立の前にある餅の塊は見えるが、衝立の後ろにある餅の塊は見えない、という形になるはずだ。

これを本来の話に焼き直すと、見えるほうの餅の塊が現世の人間、見えないほうの餅の塊が、霊界に住む、その人間の守護霊ということになる。ただし両者は、衝立の上のほうでは「一つの餅として」つながっている、という訳である。

人間と守護霊との一体性とは、大体このようなものだと考えてよいだろう。

利害の一致

右のような一体性を想定すれば、人間と守護霊が利害を一致させているのも当然のことになる。 そのとき守護霊は言う、

「現世に生きている自分を守らないと、霊界で生きている自分の立場も守れない。なぜなら現れ方は異なっても、どちらも『自分自身』には違わないから。だから守護霊である私は、生きている人間を守護せざるを得ない」と、そう。

これこそ奉仕精神によらない、きわめて中立的な「守護」の態度だと言えるだろう。

そして現世と霊界を合わせた「世界」には、ある一つの大前提的な秩序が存在する。それは現世においては厚く隠匿されてしまっているが、霊界では逆に、完璧なまでに露わになっている。そのような根本秩序があるのである。

これについて私は、第八福音書のなかで、次のように説明したことがある。

まことに神は、人が死ぬと、彼の霊魂に「公平な裁き」を与えたまう。

すなわち「他人のために、自分を捧げた人間」は高い天国へと昇っていき、「自分のために、他人を利用した人間」は深い地獄へと堕ちてゆくのである。

右のような内容が、最大限包括的に「世界の高低秩序」を作っている。

そうだとすればである。その場合、霊界にいる守護霊を益するのは、現世にいる人間のどのような状況だろうか。

守護霊にとっての切実問題

それは当然のこと、彼（守護霊）と一体であるところの人間が、より「他人のために、自分を捧げる人間」として生きること、ということになる。そのような状況がありさえすれば、守護霊のほうもまた、霊界において「天国のより高いところ」へと昇ってゆけるからだ。

そして、それが分かった後には、自動的に次のような疑問が湧いてくる。

「ではその反対に、守護霊の立場を損ねるのは、彼と一体であり、かつ現象界に生きる人間のどのような状況なのだろうか」という。

とはいえ、この問いに答えるのは実に簡単だ。先の話を引っくり返せばよいのだからである。

すなわち答えは、守護霊と一体であるところの人間が、より「自分のために、他人を利用する人間」として生きることなのである。

そのような状況が現出すれば、守護霊のほうもまた、霊界において「地獄寄りの深いところ」へと堕とされることになる。

もっとも、そのように「地獄」という言葉を使ってしまうと、話が雑というか、一面的になってしまうだろう。これについてより正確な言い方をするならば、おそらく次のように表現するのが適切であるように思われる。

すなわち、そのとき守護霊の身には――もともと彼が何処の霊域に属していたとしても、そこから――「霊界における居場所の格が下がる」ということが起こるのである。

とどのつまり、守護霊と一体であるからには、その守護対象である人間の生き方は、そのまま守護霊の「霊界におけるランク（霊格）」を決定づける最大要因とならざるを得ないのである。

認知症老人の存在様式

そして、まことに残念ながら、私はここで次のように言わなければならない。

施設において、利用者が介護者に世話をされながら生きている状態――これは様式的に言えば、明らかに「自分のために、他人を利用する人間」として生きていることに他ならないのだと。

そうだとすれば、この状況が続くことは、守護霊の側にとっては「自分の霊格を下げ続ける要因」とならざるを得ない。

しかも、認知症状が進んだ老人には、そんな自分の存在様式を、自力で変えることは出来ないのである。酷な話だが、彼らには自分を「他人のために自分を捧げる人間」へと変革させることなどは、まったくもって不可能なのだ。

おさらいしておくと「短い時間枠のなかで、タイムリープを繰り返すだけの認知症老人」には、自己改革の手立てがない。

すなわち、下手をすれば一分ごとに「元通り」になる彼らからは、とっくの昔に、自己改革をするために必要な能力が奪われてしまっているのだ。記憶を積み重ねて、そこに積極的な変化（＝自己改革）を

与えるという能力がである。

そうだとすれば、認知症老人は、その介護期間が長引くほど、彼の守護霊にとっては「自分の霊格を下げ続ける要因」として機能することになる。

タナトスの発生

事ここに至って、守護霊は、もはや最後の手段かつ唯一の手段に訴えることになる。つまりこのとき守護霊は「自分の守護対象である老人を、霊的な誘導によって、現世から取り除く」という強制執行をするに至るのだ。

そして、これこそがタナトス（死への愛）として発現する、老人本人にとっては無自覚的な「死に至る力動性」なのである。

そのとき老人たちは「なぜか」食べたくなくなるし、また「なぜか」動き回らずにはいられなくなる。食欲不振となり、徘徊せずにいられなくなる。それが守護霊からの「死への強制的誘導」であるとも知らぬまま。

となればタナトスは、守護霊たちの願望の表れであり、霊界の高低秩序を守るため、ごく自然に導かれた力動性ということになるだろう。要は、それは「必然的なこと」であり「自然なこと」であるということだ。

逆に言えば、これを止めることは「不自然なこと」ということになる。守護霊にとってみれば「自分の目論見をつぶす敵対行為」ということになるだろう。少なくとも彼らにとって不都合な行為であることは間違いない。

そして最悪の場合、そこに生じる守護霊側の「恨みがましさ」が、ときに老人の周りに、霊障的な薄暗いヴェールを投げかけることすらあるのだ。

第8章　タナトスを正当化するもの

転生輪廻について

それが自然なものであるならば、私たちはタナトスの促しを、粛々と受容するべきである。

もっとも、タナトスや、この私の言葉を信じない人のほうが、信じる人たちの人数よりも、はるかに多いのだろうけれども。

それも分からないではない。もし私たちが、生まれては死ぬだけの存在であり、かつその死が、単な

る無しか意味しないならば、確かにタナトスを受け入れることは難しいかもしれない。
いや、そのような「死んだら終わり」の世界が真実ならば「少しでも長く生命を生き永らえさせること」だけが正義になるのは当然のことだろう。無であることよりは、存在していることのほうが、それこそ存在意義があるからだ。
しかしながら、私は知っているのだ。生命が、死してなお生き続けることを。そして霊界で一定期間を過ごした生命が、再びこの現世へと生まれ変わることを。
これが一般に「転生輪廻」と呼ばれるシステムである。
そして、タナトスによる「老人の死への引き込み」が正当化されるのは、まさにこの「転生輪廻」のシステムが、自然の秩序に組み込まれているからなのである。
この転生輪廻が真実であるならば、タナトスによって霊界に引き込まれた老人たちは、やがては新しい胎児、新生児として、現世に再び生まれ出てくることになる。
その場合、老人たちを苛んでやまない「衰弱と死の苦しみ」は、どのような位置づけになるのだろう。老人たちは、つねづねそこから逃れたいと願っているのだが。
もちろん、何度生まれ変わろうとも「衰弱と死の苦しみ」には、その都度その都度、新たに遭遇しなければならない。また自身の死にも、生まれ変わるたびに遭遇しなければならない。これは致し方ない。
しかし他方、老人たちは、また何度となく若者になれるのである。生まれ変わるたびに青春を謳歌することが出来るのである。

延命の無意味であること

そうであるのならば、かの「延命」という概念の何と無意味なことだろう。衰弱し老化した状態の肉体に、いつまでも自己の生命を縋らせることの、何と徒労であることだろう。
そんなことをするぐらいならば、いっそ老人たちに、今世における生命を手放してもらったほうがいい。そうしてから、もう一度その身に、命と若さを取り戻してもらえばいいのだ。つまり転生輪廻によって、老人たちに若者になってもらえばいいのである。
老年が不幸であるならば、逆に若年であることは幸福なのだろう。だとしたら転生輪廻は、老人を幸福に導く道ということになる。
そしてタナトスは、老人たちをそのような道程へと導いてくれる最初の働きだ。そうだとしたら、これが残酷なことであるはずがない。
むしろ、これを不自然に「残酷なこと」として貶めているのが、マルクス主義を淵源とする無霊魂説であり、死んだら全てが無になるという考え方なのだ。
正直このような考えに翻弄されている人々を見るにつけ、私にはそれが何としても愚かしく見えて仕方がないのである。すっかり霊魂の不滅を確知している私には。

第三福音書について

ところで私は、すでに第三福音書において、転生輪廻についての、まとまった解説を試みている。その概略を示せばこうだ。

――まず人間がアルベド（神秘体験）という悟りをひらくと、永遠という時間形態を知ることになる。かかる永遠は、始まりも終わりもない無始無終の時間なので、それにより自己の不滅性が担保される。

そして、この不滅の自己が、今度は「生滅必然の現世に生きる自分」と、その存在形態の折り合いをつけることになる。するとそこに転生輪廻のシステムが生じる。

転生輪廻とは要するに、不滅の本質的自己が、現世においては「生まれては死に、死んでは再生する」という円環を描き続けるということだからである――

とまあ、ザッとこのような内容を述べたのである。

しかし、右の説明を読んだだけでは、読者は転生輪廻について、きっと少しも納得を得られないだろう。

それも当然のことで、私は第三福音書で「永遠」という時間形態について説明するために――ただそれだけのためにも――その前に、第二福音書という、書籍一冊分の文章を割いているのである。

そして、それぐらいの「前段の説明」がないかぎり、永遠というものの内容は、決して読者に伝わらないものなのだ。それほどにも複雑なものなのだ。

通史の宿命

実は第二福音書と第三福音書は、その二冊で『ヘルメスの杖』というタイトルの精神発達史を構成している。つまり第二福音書は『ヘルメスの杖・上』であり、第三福音書は『ヘルメスの杖・下』なのである。

そして、この精神発達史は、歴史になぞらえると「通史」に他ならない。

特殊史と対比される「通史」とは、文明の始まりから終わりまでを「一つの流れ」として叙述するスタイルの歴史叙述のことをいう。

そんな通史は、つねに有機的な総体性を背景にした「流れ」を保っている。

そのため、そこから任意の一部分を切り取ってしまうと、とたんに、流れという生命力を失った「死せる断片」になってしまう。

たとえば、流れる川から掬いあげた水は、同じ水であっても、もはや川の流れとは無縁であろう。掌のなかの水は、もはや流水ではないのだ。それと同じことである。

よって、右に掲げた「転生輪廻の概説」もまた、この生命力のない断片的文章ということになる。ゆえにこそ、これを読んでも、読者は何らの納得も得られないのである。

したがって、転生輪廻についての理解と納得を得たいという読者に対しては、私はどうしても次のように言わなければならない。

たとえ長大に感じられたとしても、どうか第二、第三福音書の全体を「通史」として読了してください。そうすればきっと転生輪廻の何たるかが分かるでしょう、と。

もしかしたら不親切に聞こえるかもしれないが、これが、ここで私が示せる最大限の誠意なのである。

第三部

第9章　宗教としてのマルクス主義

介護老人制度の根底にあるもの

前章までの結論として、霊界や転生輪廻まで視野に入れれば、タナトスの表れは必然のものであること。ゆえに、そこに敢えて「残酷さ」を見出す必要はないという見解に至った。

しかし、老人介護の現場には、このタナトスの働きを決して許そうとしないものがある。それが現代医療体制であり、介護保険制度である。

これらの医療・介護制度にとって、死は絶対悪である。

つまり人間は、生きている時にだけ価値を持つものであって、死んでしまったら意味や意義を持たないものになってしまう。だからどんな状況下にあっても、何としても、命は生き長らえさせなければならない。

こうした考えを信奉する彼らにしてみれば、老人を死に引き込むタナトスの意義など、分かろうはずがない。というより、はなから「理解できる機縁すら持っていない」とすら言えるだろう。

そして、こうした医療・介護制度の根底にあるのがマルクス主義である。

マルクス主義は、労働者の福利厚生を充実させるために、社会全体が個人（労働者）を守るようなシステムを作り出した。単純な労働組合がその始まりであったろうが、それはのちに分岐しながら様々な形を取るようになった。

こうした流れの中に、現代的な医療保険制度や、介護保険制度なども成立しているのである。そして、それが介護の現場に直接的に関わっている。

主義から教への変更

ところで、これまで私は普通に「マルクス主義」という言葉を使ってきたが、私は近頃、ここに一考を要する問題があると感じるようになった。

というのは、私は、このマルクス主義という言葉が、その響きのゆえに、ある「本質的な問題」に、じつに厚い覆いをかけてしまうという事実に気づいたのである。

すなわち従来どおりに「マルクス主義」という言い方をしてしまうと「それが実質的には宗教であること」が曖昧になって霞んでしまうのだ。「主義」では、どんなに穿って見てみても、せいぜい疑似宗教ぐらいにしか感じられない。

実際には、それは真正にして純粋なまでの「宗教」であるというのに。

まことにそうである。第六福音書から一貫して言っているように、マルクス主義は宗教なのである。無

神論、唯物論、無霊魂説という独断的なドグマを持った立派な宗教であり、決して社会科学などではあり得ない。

さらに言えば、これは悪魔たちが拵えた邪宗教団である。

悪魔とは、億年にわたって人間を騙しながら、多くの人間たちを地獄に引きずり込んできた霊的な強者たちのことだ。

彼らは、どんな甘言蜜語が人間を引き寄せるかを、腹の底から知悉している。それを悪徳業者的知性と呼んでもいいかもしれない。

そのため表面的なレベルでは、彼ら悪魔の言葉は、優しく正しいものとしか感じられない。しかし、その甘言蜜語は、細くて丈夫な糸でもって、地獄の倫理観に通じているのだ。

皮肉にもマルクス自身が引用している言葉であるが、西洋には「地獄への道は善意で舗装されている」という格言がある。悪魔はそれを「善意の言葉で道義を舗装し、人々を地獄に引き込む」という形でもって、まさに恣意的、意図的に現実化するのである。

こうした悪魔が拵えたのだから、それはまさしく、邪宗教団そのものであろう。

それゆえ私は、これからマルクス主義のことを、通常的に「マルクス教」と呼びならわしたいと思う。まさに仏教やキリスト教と同じだ（むろん内容は大いに異なるが）。

マルクス教――このように呼べば、それが宗教であることを、誰一人として見誤らないようになるだろう。

死と死後の無意義

その上での話をしよう。このマルクス教という強大な世界宗教は、ロシア革命（ソ連の誕生）から百年、ソ連の崩壊から三十年が過ぎた今も、私たちに対して、実に大きな悪影響を与えている。

というのも、現代における思想的趨勢は、まさに無神論的、唯物論的、無霊魂説的なものであり、これらはそのままマルクス教の教義であると言ってよいからだ。

そして、その影響が医療、看護、介護の分野に、とくに強く現れ出ている。

元来、右に挙げた分野では、どうしたって人の生死に触れない訳にはいかない。

そうであるのにも関わらず、医師、看護師、介護士に就くためのテキストには、神は言うに及ばず、霊魂のレの字も書かれてはいないのである（※）。

そして社会システム上、そうした無霊魂的テキストを学ぶことによって、学生は医師、看護師、介護士になっていく。これらの分野がマルクス教の強い影響下にあるとは、結局そういうことである。

さて、そのようにして実際に医師、看護師、介護士となった人たちにとって、人の生死とは、果たしてどんなものだろう。

無霊魂説がテキストの根底にあるからには、人間は死んだらそのまま消失することになる。彼らにとっての死とは無になることであり、死後に霊魂が生き残って、霊界で何らかの経験をすることなど、まったく思いも及ばない。

それゆえ彼らにとり「死」と「死後」には、一切の意義がなくなることになる。

逆に意義が生じるのは、ただただ「生きていること」「生き抜くこと」「生きている間に出来ること」「生きている間に味わえること」だけである。

このことをして、おそらく「生の無条件的肯定」とか「生の絶対的肯定」という言葉で、言い表すことが出来るだろう。

※書かれていない、といった「ない」ことに関する出典を行うことは不可能である。書かれて「ある」ならば、その箇所を引用出典することが出来るが、それが「ない」のだから、引用は不可能事にならざるを得ない。この問題に関心がある方は、随意に看護や介護のテキストを読んで確認していただきたい。

生の絶対的肯定

この「生の絶対的肯定」が老人介護のなかに入り込むと、それは「患者や利用者を死なせないようにすることが、現場における絶対的な正義である」という理念に結晶化することになる。

それだから、そこでは利用者の年齢や能力、状態などは一切問われない。ただ生きていればよい。死ななければよい。

とにもかくにも、いまその人間が生きているならば「その生を継続すること」だけが、無条件に肯定的な価値を与えられることになるのだ。

こうなれば当然「延命上等」「植物状態上等」ということにもなってくる。

つまり老人介護の現場には「生きていること＝善」「死ぬこと＝悪」という図式が、堅固なまでに出来上がってしまっているのだ。

となれば、タナトスによる死についても、それは「単なる悪いこと」以外の何物にもなれない。彼らが主張するのは「とにかく生かせ。生きていることだけに意味がある。そこにだけ意義がある」ということだけなのだ。

これがマルクス教の影響下にある、老人介護の現場の実際の姿である。

終活アドバイザーの資格

ここまで事の本質が分かっていなかった時期に、私は「終活アドバイザー」の資格をとったことがある。

字面どおりなら、それは介護福祉士の資格などよりも、ずっと先鋭的に「死」に焦点を合わせた資格であることになる。終活の「終」は、死のことに他ならないからだ。

霊体質である私は、その当時にあっても、当然「死後の世界」や「死の意義」について並々ならぬ関心を抱いていた。

それだから私は、この「関心」につながる仕事が出来るかと思って、かの終活アドバイザーの資格獲

得に挑戦してみたのである。

ところが、終活アドバイザーのテキストに書かれていたのは、すべて「死ぬ前のこと」「死ぬまでのこと」だけだった。

つまり「死後の生命」についての情報は、一切そこには書かれていなかったのである。しかも、それを探求する姿勢すら、一片たりとも描かれてはいなかった。

ということは、要するに「終活」という、死に直接触れている部分にさえ、マルクス教の影響が色濃く及んでいたのである。

私は、この終活アドバイザーのテキストの内容に、心底ガッカリしてしまった。一応資格は取ったものの、そこに愛着など生じるはずもなかった。

であるというのに、いちど資格を得ると、その後は「終活アドバイザー協会」に年会費を継続的に支払わなければならないときている。さすがに気分が乗らないので、結局私は、一年ほどで協会から脱退してしまったのだった。

第10章　マルクス教とタナトスの相克

介護の理想と現実

マルクス教的なドグマをよそに、実際の介護の現場では、明瞭なまでにタナトスが老人たちに働きかけているリアルがある。

そこにあって老人たちは、自分の死を求めて執拗に「生から逃れるための行為」を繰り返している。そうした普遍的な事実が見られる。

そして既に説明してあるとおり、それは、自然の法則に則った事象であり、善悪の価値観とは何ら関係のない、ただ「生命にとっての必然である」というだけの事象である。

それに対して、介護の現場から少しばかり遊離したポジションには、マルクス教の影響下にスッポリとくるまれている、経営者や医療従事者、ケアマネージャーの世界がある。

そして、これらの人々は、まことに骨の髄まで「マルクス教」の影響を受けている。加えて、そうであるために彼らは、タナトスの現実を嗅ぎ分けるための「霊的な嗅覚」を完全に失ってしまっている。

実質的に彼らが生きているのは、マルクス教の教義が書かれた「テキストの世界」であると言えるよう。それは疑似現実的な世界であり、決して本当の現実世界ではない。

もっともケアマネージャーの場合は、介護の現場（現実世界）からの叩き上げということもあるだろう。だが他面において、この資格が、その取得に際して「介護の現場における経験」を必修要項としていないことも事実なのである。

あるべき姿勢の要求

いずれにしても、彼らが自分たちの行動規範としているのが「マルクス教の影響を受けたテキスト」であることは間違いない。

そこには常に、老人たちの命を守り、老人たちの生きがいを守ることだけが書かれてある。

そして、これとは対照的に、老人たちの死後の生活については、そこには一切、何も書かれてはいない。テキストの執筆者にとり、死後の世界というものが、論じるに値しない、どこまでも無価値なものだからである。

このようなテキストの理念に則り、彼ら――経営者、医療従事者、ケアマネージャー――は、現場の人員に対して「介護者として、あるべき姿勢」を求めてくる。すなわち介護者に対し、

「老人たちの生命を守れ。老人たちの健康を守れ。老人たちに死を感じさせるな。老人たちを死なせるな。老人たちに死について考える時間を与えるな」

などといった要求を突き付けてくるのである。

これは余談だが、インターネット上のアドバイスで「介護職員は、黒い服を着るべきではない。それが葬儀を連想させる色だからである」というのがあった。

だが、そのように葬式を想像させなければ、実際に葬式の場面が巡ってこなくなるのだろうか。

いや、それは絶対に巡ってくるものであり、単に避けて済ませればいいものではないはずだ。これには私もさすがに、

「やれやれ、介護の世界では、本当に『利用者に死を考えさせないこと』を善行だと考えているのだな。そのようなことは無駄なあがきなのに。絶対に人は死ぬことになるのに」

と何ともシニカルな気持ちになった。

話を元に戻すが、彼ら経営者、医療従事者、ケアマネージャーが要求する内容は、明らかに介護の現場にある「現実」、なかんずく霊的な現実とは乖離してしまっている。

現場においては、つねに老人たちが、タナトスによって死を求めている。しかも、その具現化のためには、ほとんど手段を選ばないぐらいなのである。

狭間の介護士たち

そうなると、ここに「理念と現実の板挟み」に苦しむ人々が現れることになる。それが他でもない介護士たちである。

長上（経営者、医療従事者、ケアマネージャー）が求める「老人たちを延命し、その命を無条件に守れ」という要求。

認知症老人の深層から響く「早く私たちを死なせてくれ」というタナトス的な声。

この二方向からの対立に挟まれる介護士たち。彼らはその矛盾した内容に、職場にあるかぎり、ずっと苦しむことになる。

むろん、彼ら介護士たちは、多くの場合、信仰者ではないだろう。また私のように霊体質でもあるまい。よって彼らは、あのタナトスの霊的なメカニズムを知ってはいまい。

また、介護士の多くが、人格の高潔を誇っている訳でもなかろう。

しかし、そうであるとしても、彼ら介護士は、確かに「現実の世界」を生きているのである。そして、その現実のなかで生じる問題によって苦しんでいるのである。

その点で彼らの足場は、かろうじて自然の法則の範囲内、神の世界の領域内に属していると言えるだろう。

ファンダメンタリストの理想論

それに対して、マルクス教の影響下にある「生の絶対的肯定」に基づいて経営や指示を行っている者たち。すなわち経営者、医療従事者、ケアマネージャーは、その現実離れした理想論によって、不当に介護士たちを悩ませている。

そして、そのように彼らが現実離れしてられるのは、彼らが常時、現実ではなく「宗教的教義」を見つめていられるからなのだ。むろんマルクス教の教義をである。

そう、実のところ、彼らは立派な宗教者なのである。それは次のような意味において真実であると言える。

人は、単に、神を礼拝するときに宗教的であるのみならず、感情と行為の目標や指導者となった人物あるいは主義のために、あらゆる精神力を捧げ、意志を完全に服従させ、熱狂的信念の情熱を傾けつくすときにもまた、宗教的なのである。

〔彼ら〕の確信は、盲目的服従、粗野な偏狭さ、猛烈な宣伝欲のような、宗教的感情に固有な性質をおびている。従って、その信念はすべて、宗教的形式を具えているということができる。

もし群衆に無神論を信奉させることができるならば、この無神論は、宗教的感情に特有の偏狭な情熱を伴って、外形的にはたちまち一種の宗教となるだろう。

ル・ボン『群集心理』櫻井成夫訳より抄出

無神論（マルクス教のドグマ）を奉じる宗教者であるところの経営者、医療従事者、ケアマネージャー。しかも彼らは、教科書（テキスト）を不磨の大典にしているファンダメンタリストでもある。不磨の大典とは、擦り減らないほど堅固な法典という意味であり、ファンダメンタリストとは、原理主義者とか、教条主義者と訳される人たちである。

かかるファンダメンタリズム（原理主義）の特徴は、独善性と狭量さにある。それがモロに現れたものが、キリスト教原理主義者や、イスラム原理主義者によるテロリズムであろう。

他方、介護現場のファンダメンタリストは、その視野狭窄的な理想論によって、現実のなかで呻吟し

ている介護士たちを、ただただ責め続ける。もっとも、洗脳されきって、自身がファンダメンタリストとなった介護士もいるけれども。

いずれにしても、すでに私は、マルクス主義をマルクス教と言い換えている。それは宗教なのであり、しかも無神論を奉じる――ゆえに神の御心から離れた――邪教なのだと。

そうであるならば、彼ら介護の現場に巣くうファンダメンタリストたちが、宗教的情熱を持っていることは何の不思議もない。

彼らは「自分たちの意見にそぐわない現実」を差しだす介護士たちを、宗教的情熱をもってジリジリと難詰する。それこそ、キリスト教原理主義者や、イスラム原理主義者の独善性と同じように。

自然摂理から外れた優しさ

改めて言うが、介護の現場においては、マルクス教的な「生の絶対的肯定」による原理主義的支配が行われている。

これは介護の現場を知らない、ごく一般の人々にとっては、大変見えづらい真実であろう。

私自身にとってもこれは、十五年ものあいだ介護の仕事に携わっていても、ごく最近になるまで、明確には見えてこなかった真実なのである。

むしろ逆に、介護現場のファンダメンタリズムは、部外者からは、大変優しいことのように見える。それは老人に対する優しさ、生命に対する尊重ぶりとして見える。

まことにそうなのであって、私自身からしてそうなのだが、ただ介護の仕事をしているというだけで、他人からは「優しい人」としてイメージされることもよくあるのだ。

しかし「生の絶対的肯定」という優しさは、実際には、自然の摂理から離れた、邪宗教的な優しさなのである。結局は自然破壊にいたる優しさなのである。あのアレゴリーに則って言えば、ウサギがトラに食べられているのを前にして、

「ウサギが可哀そう。トラに食べられないようにして」

と訴えているのと同質の優しさなのである。それを現実化すれば、結果的には、島そのものを丸裸の荒野にしてしまうことになる「優しさ」なのである。社会秩序を機能不全にしてしまう「優しさ」なのである。

第11章　純粋なファンダメンタリスト

原理主義の担い手

介護の現場において、とくに純粋に「マルクス教的なファンダメンタリズム」の担い手になっているのが看護師たちである。それに次ぐのがケアマネージャーであり、最後にくるのが経営者だと言えよう。

というのも経営者は、その立場上「タナトスに遭遇している介護士たち」の存在を含めた「現実」を見ながらの施設運営を行わなければならない。そのため、そのファンダメンタリズムは、ある程度まで薄まることを余儀なくされるという訳である。

そしてケアマネージャーは、経営者と看護師のあいだで、イデオロギー的な引っ張り合いをされることになる。

つまりケアマネージャーの手は、経営者からも看護師からも引っ張られているのである。彼のファンダメンタリズムの濃厚度が第二位（中間順位）になるのは、そのような理由からである。

そして、このような図式がある以上「生への絶対的肯定」の原理主義を主導するのが看護師になるのは当然のことであろう。

看護師と介護士

そして、この原理主義と、タナトスが引き起こす霊的現実との相克は、もっぱら「看護師による介護士への詰責」として現象化する。

この詰責は、どうしても起こらざるを得ないものだ。

看護師たちは、現実のなかに、つねに教科書（不磨の大典）に書かれているような理想像が現れることを望むことになる。それがファンダメンタリズム（原理主義）というものだからである。

しかし、その理想像というのは、実際にはマルクス教がドグマ（教義）として描いた虚像でしかないのである。つまり本物の現実とは、明らかに遊離しているものなのだ。

したがって、看護師たちが望む「現実」は、実際に現実化されることがない。少なくとも中長期的には、そうであると断言することができる。

具体的に言えば、認知症の老人たちは、介護士の目をかいくぐってでも、己のタナトス的衝動を貫徹しようとする。老人たちは「強硬的に」食事を摂らずにやせ細り、あるいは徘徊しようと立ち上がっては転倒したり転落したりする。

それは当然、老人たちの体調不良や怪我、そして死に直結する。

そして看護師たちは、老人たちが右のような事態に陥った原因を、ほとんど一方的に、介護士たちの怠慢に帰する。それこそ「それ以外の原因など存在するはずもない」とでも言うかのように。

かくして看護師たちは、一片の迷いもなく介護士たちを難詰する。

そう、この場面で躊躇う必要などないのだ。宗教者である看護師たちには、この場面で「現実」を見る義理など少しもないのだから。

一言で言えば、それがファンダメンタリズム（原理主義）というものなのである。

彼ら彼女らは、ただ常にマルクス教的な教義だけを見ればいいと思っている。その教義にそぐわない現実などは、原理主義者にとっては「現実」の名にも値しない。

それだから看護師たちにとっては「現実の名にも値しない現実」に日々密接に関わっている介護士たちを詰責することなど、まるで朝飯前のことなのである。

看護師のイメージ

そういえば、民間のアンケートで「看護師についてのイメージ」を集計したことがあるそうだ。そしてその結果、首位に「自己主張が強い」という評価が輝いたのだという。

自己主張が強い――これは相当に分厚いオブラートにくるんだ表現だ。

ここから無理やりオブラートを剥がすと、中から「相手のことを考えず、無理にも自分の主張を押し通そうとする人間像」が現れることになる。

これはかなり看護師の実像に迫った表現だと思う。

もちろん、すべてのナースがそうなのではない。だが右の表現は、宗教的ファンダメンタリストとしては、実に「そのようにならざるを得ない人間像」なのである。ことにマルクス教の影響下にある原理主義者としては。

このような「型」から抜け出してもらうには、現況においては、看護師たちの人間性に頼るしかない。あるいは、その人間性を「元来の性格」と言い換えてもよかろう。

ただ、それは宗教的熱情の炎に比べたら、か細いともし火程度に過ぎない要素なのである。

正義の欠点を抱えながら

さても看護師たちは、宗教上の原理主義者と同じように、正義感に燃えて介護士たちを責め苛む。

そもそも正義というものの欠点は、その視野が狭いことと、それ以上に「残酷なこと」である。そして看護師たちは、まさにこの欠点を抱えながら「自分たちの正義」を押し出してくる。

そして、それを社会全体が後押ししてくる。すなわち、現代日本の風潮がきわめて左傾していること。看護師たちの教科書が唯物論的であること。介護保険制度がマルクス教の寵児であることなどが、看護師たちの主義主張を「より強いもの」へと増進するのである。

実際、現代において、彼らの「生の絶対的護持」に反旗を翻す者など滅多にいまい。敵が強大すぎるからであり、その挑戦自体が、ドン・キホーテ的愚行に見えるからである。

そうなると、無敵の強勢で、看護師たちの「狭窄的で残酷な正義」を向けられた介護士たちこそ哀れだ。彼らは他方において、日常的に、利用者たちのタナトスに翻弄されずにはいられないのだから。

ロマのような介護士たち

看護師たちに叱責を受けている介護士たちの姿は、老人介護の現場では、本当にいくらでも見られるものである。

その結果、介護士という職種は、転職の回数がきわめて多いものになっている。

つまり介護士たちは、タナトス的な霊的現実と、看護師たちからの詰責に挟まれて、ついに自分の居場所を失ってしまうのである。

さりとて、それが同じ介護業界であれば、彼らが職場を移したところで、なんら変化は起こらない。どこの施設であれ、マルクス教の影響下にある点では全くの同様だからである。どこの施設にあっても、看護師たちは、彼らのファンダメンタリズムを存分に発揮していることだろう。

そのため軋轢はスパイラル化して、介護士たちの転職もまたスパイラル化する。そうしてついに介護士たちは、その職種そのものから、次第に厭離していくことになる。

これによって生じるのは、介護の現場における、慢性的な人員不足である。なんと言っても介護士が少ないのだ。だから介護士の求人は驚くほど多いし、それはもう「引く手あまた」と言っていいほどなのである。

事実私も、まるでロマ（ジプシー）のように、複数の施設を渡り歩いている介護士を、何人も知っている。そして私は、その旅路に果てがないことも、また良く知っているのである。

左の山羊になるな

本章の最後に、この問題が「行き着く最終地点」を示しておこう。つまりマルクス教の原理主義が、最後の最後に生き着く地点の話をしようというのである。

私は第六福音書で、マルクス教を「左の山羊」であると規定した。マタイによる福音書に出てくる次の一文になぞらえてである。

「すべての国の民がその前に集められると、
羊飼いが羊と山羊を分けるように、
彼らをより分け、
羊を右に、山羊を左に置く。

そこで、王は右側にいる人たちに言う。
『さあ、私の父に祝福された人たち、
天地創造の時からお前たちのために
用意されている国を受け継ぎなさい』

それから、王は左側にいる人たちにも言う。
『呪われた者ども、わたしから離れ去り、

悪魔とその手下のために用意してある
永遠の火に入れ』

ここでは一方に「羊」「右」「祝福」「（神の）国」がセットになっており、他方では「山羊」「左」「呪い」「悪魔」「（地獄の）永遠の火」がセットになっている。

そして、マルクス教に連なる唯物論的医療や、老人介護制度が、最終的にどこに連なるかは、もはや言うまでもない。この最後の審判の情景は、かくも左（左翼）に厳しいものなのである。

少し哀れにも感じるが、人々が霊的生命の永遠性を忘れたとき、この過ちと報いの流れは、必然的なこととして始まってしまったのだ。

死海文書とのつながり

この問題は、もしかしたら新約聖書よりも古い、死海文書の予言にも繋がっていくかもしれない。

というのも、死海文書の『戦いの巻物』には、その終末期の情景として「光の子らと闇の子らの最終決戦」が描かれているからだ。

光の子ら（光の天使）を導くのは大天使ミカエル、闇の子ら（闇の天使）を導くのは悪魔ベリアルである。そしてベリアルの名前は「価値なきもの」という意味を持っている。

両勢力はやがて、それぞれの天使の指揮の下、宇宙規模の大戦争に向かうが、この戦いは現実のローマとの闘いと言うよりは、終末論的である。激しく苦しい戦いを通して、神の手により決着が付けられ、光の子らの勝利に終わる。

土岐健治『死海写本』より

実在せし生ける神の目からすれば、価値なき考えの最たるものは「無神論」である。そこには明白な上にも明白な誤りがあるからだ。それは全くの無価値（＝ベリアル）である。

その無神論を最高の教義とするマルクス教を、ベリアルが導く軍勢と考えるとすればだ。すでに無神論的な意見が多勢を占めている日本の国論などは、もはや事実上「闇の天使の大軍団に占領されている」ようなものであろう。

この大軍団を大向こうにして、私は戦いを挑んでいる訳である。そして、そうであるならば、当然のこと私の背後には、神と天使たちからの霊的な助力があるはずだ。

しかも私は、第八福音書で示したように、現にコズミック・マン（宇宙的人間）なのである。

錬金術では「大宇宙の息子」などとも呼ばれるが、私はＧＷ１７０８１７を接点にして、宇宙の摂理と共鳴している。つまり見た目は一人であっても、私はそのような「大勢力」「大軍団」なのである。

ならば、私とマルクス教との戦いをして、これを「宇宙規模の大戦争」と言っても差し支えあるまい。

そして最終的に勝利するのは、あくまでも光の天使の軍勢である。そのことを証するかのように、かの『ヨハネの黙示録』の記述もまた、

「倒れた。大バビロンが倒れた」と言っている。そして、この大バビロン、大淫婦バビロンとも呼ばれる女性は、マルクス教の「優しさ部門」の擬人化であると言えよう。

大淫婦バビロンの倒壊Ⅰ

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社